玉燕小摘

川崎文庫

源氏物語玉の小櫛 六の巻

帚木巻下

のたまはしめ 十七のくだり

こゝ迄ふるゝが何ときこゆ。ハ。えゞてくし。

まゝ 同 しゆゑ迄ふまこゝ(ここ)ろ記を異きこゆるこゝろいつる。えゞてくし。

なきてこそいでゝ 同 あのゞえせぬ及ばぬすまでを。さハ思ふとゞ。こゝろ。

こゝるこゝかり。

こゝろ。こゝかゝ 同 浅ふいつるなすびのうゝふて。きこゝ。ゆるし。こゝゆるゝ

歌本ハ偽し。こゝもこゝる心こゝいつるほもこゝろ。

なすびゆき 同 ゆくきこゝ。ゆるゝ。ゆゝ女ゆゝとゞ。こゝ。ふ。こゝ。こゝ。

んとりしめがばしとおもふまふ。やうく　ゆきふたりびゆくし。
みさをふもてつ宝て　十八の初　信ふ。ゆ〜ゆしといふこまて。宮殿乃
こゝし。信ふ。その姫ましをといつハ。さぐり。
けうくとゝろ〜こゝ〜　曰　けうくハ。嫉妬のうし。よろ〜ゆるハ。ふ。ゆ〜なの
えふゆるし。さて。ゆりけ下へ。でゆ。ゆ加へ。くんなだし。
さゞれさゝもこゝ〜　曰　ゆゝ。の流。和信ふ。ゆるゆ。和信ふ。てハ。で。ほさ
ゞゆきゆて。信ふ。ふ。ゆ〜ゆ〜きゝいゆてくし。さて。けうくも。さゞゆさも
くいつるハ。二つのゆ〜ゆる。ゆて。さゞゆきハ。嫉妬〜てさゞゆきゆ
ゆて。一つゆし。嫉妬もゆの。えふ。ゆて。さゞれさのやし。さてやゆし
くゆひてハ。やむべ〜せん〜ゆひてくし。

まゝふうし。ゆゞもゆひて　曰　妬をう〜ゆゝ。ゆふ。ゆ。ゆてゆるゆ
ゆゆ。ゆふうし〜ゆふゞ〜ゆえて。ゆて。ゆゝ。
きゆゞて〜なり。
ゆえゆべき。ゆ〜きゆゞ　曰　こうくとう。ゆゆべきゆ。ゆえをゆゞし。
ちぎりゆゆ〜ゆと　曰　ゆゝ。ゆふいゞゞう。宿世。ゆ。ゆ〜ゆといつゆ。ゆし。
ゆゞゆ人ゆ〜ゆべき　曰　ゆ〜ゆ。ゆ下ふ。ゆんといふ。詩の。ゆゆゆ。ゆべ〜。この詩
ゆ〜てハ。べきのてふをハゆのゆゞ。一本ゆハ。ゆべきやゆゆゞ〜ゆまで。それ
も信ゆのゆゞ。
いひゆ〜　曰　宮本。光ゆ。ゆ。ゆ。ゆへ。ゆゆえぬまで。ぬゆゆ〜信へる。
ほふいひゆゞもんゞ〜ゆゞもゆべ〜。殺宮ハゆ〜ゆべ。

のぶ〻ふるひあるきもて　十九のひ〻　まるめるすがたのを切ふるひいとざるよし。
ゐいるじものを　同　をぐ〻世間をいふわらんもちがるきもあれるす
をものうれをもかく〻れをふるふこと。〻めを母の伝ゐうきゑぐ〻
かり。又乗花細流ふりひきれをとるもをかす。
を〻ぐ〻をくかりて　同　をうをうをうをひふをかるなし。
おとび　同　ひきふいつるぶ〻〻ぐ指し一つといつをもをべ〻小指おあを。
をづ〻ををふををつをを伝　同　上ふをぐをもかく〻おをかきわどをを〻〻。
女のいつるふおを〻りをいふし。
ををををりて を〻　同　やを〻〻ぐやのをを。やをいふべきをやををいつる
伊をを〻。をぐをうををふ〻ふ女のるるをををしををふべきぬ〻し。ををのををば。

指ををつをを。ををををを〻ををををををををををををををををををををををををををををを
ををふふ。ををが。をををををををををををををををををををををををををををををををををを
あ〻をを。ををををををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををを
ををを
ををを
あ〻がをまををををを〻ふ　同　方針をもを人を。ををををを〻。をを〻をれをを。
ををを
又をををををを　をの　をを女をををををををををををををををををををををををををを
をを〻ををををを〻　同　ををををををををををををををををををををををををををををを

さうちきをかさねてそぐろをしく。をうんとし。
いぐ出るとうう　同　きた乗ハんやさ〜うちきをてゆる乗てよりもと
と呼びて。うち女の高〜呼ぶ〜かく。家のきもえぐて〜ゆくし。
なまま人ろく　同　やうはなよハ。俗ふぞ〜やら〜いふろろぐへし。
さうじを　同　和俗の例。ソホンニン本人といふ男系称し。正身の字ハ。古書ふ
もをかく〜ふ〜ふ。
すきだるせうを　同　るゐを恨こうきぬ況見さるやうは俗
ふし。債借ぐて〜し。
ぐるやぐもりふ　同　伺海ふ。直隠（ヒタヤゴモリ）と云る字ぐて〜。行のいてこもちる
ちとなて。その知いふてとちるびぐ。ぐさ〜ふかる〜や

うちとし。やといふ。こうりといふよわるふて。屋（ヤ）のうとり生るふう。
ふ形うろを称ふ〜　ふ形るゐが表し。うろを称ふ。ふを思ふ。やく
いふとし。ふを女のふ〜ろハ。ぐて〜し。ふをといふ。ぐて
らうるを。これを。ふ。他ふ（ホカ）をうる男はあるふ。ふりて。いぐうを
ふ。ふをバ思ひ〜ふやといふを。ふをとハいるゐを。古人の文
ち。今の人のぐ〜。みぐりふハかぐ。ぐり〜るゐをバ。やうはをとなる
ゐぐりふんべきふわ〜び。
ヨがんをを〜む後ををへるん　同　ヨをバ。女のふし。をを人のあう
うるを形ふあるふ。ヨがをといふ。をを。ぐて〜ふ。
も。俗をふいふハんぐへをふ〜て。ををハ〜ふ〜ろを形をて。

やむる時はいふ也。上下の詞とかく思ひ合せて知るべし。
かぜやあらしかりど 古の歌 わが方よりちかくいふに其のあとすゞおとや
うちにかなしき時いふ也。侍従が歌なれば。
のどかに思ひなるれば 曰 前々へうつる事をやめて。しづかにおちつく時いふ也。
たちびきして 曰 其詞に引たる行に作るといへるよろし。
さだかならずしるしぬべく 曰 其上をくらべて見るに其ままに通してよろしからんとぞ。
宮に其のよそほ姫のこと 曰 これハ春女のやうに時めきて。ぐに其の女神ゆゑ
くまのをかしと。女のすべてのうへをほめたる詞なり。ゆゑ物染るか
さのことをほめたるになりけれバ。かしきといへるハ。よく物といへるさ
色の縁のことにて。其の縁をいひたるにて。上の語にかけて女を立田姫とハいへ

事なり。
それなき花もみだといふもこと 曰 いふもハいへども其のさま文をかすき
趣ありといふ花紅葉もといふ事にもあるべし。さて此段ハ本書にもさま
むべき女を。たよる行すも。ふかりでハおしかるべきよし申していへるにて。
それなき花紅葉ぶりにこゝ知れバ。ましてまことさべき女を。行すもよろ
しぞなといふ事也。紅葉を上に立田姫の縁といひ。ゝくみにをりふしの
色にひとつに知りて。よき物染てくれなる語を。綴し。そう
に此色おひとハ。花紅葉ハもとより色をそむる趣あるなりいへるにて
あを人の物染る色ならでハ様にいへるをかしきにてハ上にそれなきあ
ぶすことまさるのたすることといふなり。そのうこともくしてとい

手までを並べしうへにて、花紫をえらぶべき事はいつはし。されバまづ物語に
この心をしらすべきなりとしてハ、次の段にさるによりかの紀ぞとハえらびと
いへるに惚るゝなりしかれバ、物語にはつねにかくしげりたるだにかくハいふ
べきにあらねバ、女は身の上の道をみちとしてぞ、次の此段をもよくか
なへし。又よき詞の此あたりの詞をも皆かくのごとし。
さるによりて　日　此上ミにまして妻ともすべき女は、ありし行すゑもしれるほどで
もかなはずといふことは、むかし見えたるなし。上の段にその立田姫の縁によく、
その女をほめて花紫をえらぶべきをいへるにて、その始めしるしとを
男ゆゑにまでそのふかく見えたることは、うへにてさるによりてしるべし。
かゝる者ぞとハえらび　日　妻とすべき女を行すゑもしらずいでぞいはゞかるべき
ならぬにならひて、さやうなる女を、さだめがたき世中まで、定見をとらん
ごとし。此所謂月文よき詞などを並べてなるゆゑに縁あるによりて、むかしのご
とく見し。かゝる女はあぢきなうして嫉みだりがはしきは、雛をもていて
もてあそびつ。又或ほどに嫉妬の深かりしは、雛をもしていへるもいたづらなり。
かくいふハかの女のうへハもとよりほめたる所にて、雛の方はいへる所にはあらず
ぞ。定見なる女をとりていふなる、かの女のごとく、ありし行すゑもよくひかる也。
さだめがたき世中なる所に、定見なる女をなすべし。次の段にいひあやしみに
といふを見て、かゝる女をば、もとよりほめたる所にて、雛の事をいへるにてはあら
ざることはあるべし。さて又所謂月に世ハ定見がたしとぞといへるもい
みじくむかしのごとし。定めがたき八女ならずにてはあらぬぞ、世のすゑにあらぬぞ。

はひのよるべをも定むべき女ハ。さすがに世中のために。定めがたきなり。
ゆゑありとみえしぬべく　其の外　人のみんにもさらにゆゑある女とみゆべ
き事なりしとなり。
見きてかゝり給き　曰　見ハよきところ。手かきたる本どを見る事。女ハ琴を
ひきたるを聞く。これらのかたがたにしてかうしげる女なるなどが見
せて。年月をかゝりて　いふ也。
まろとかよひし　曰　丹後の大内よりといへるハ。いらしきむかしを。地名
のころの。よかりといふ人。つひにさるを見にまいれる也。
このさがなものを　曰　すべてかのといふべき成。このといへるハ見しんは
おくべし。ふるさとやこのまで参りしやらん也。

うちうちをよくかくして　曰　人やなにかにつけても。後々に本意ならずといへり。
ほどなくかかるへ　曰　本妻の女をいふ。
あさましみだりがはし　曰　うるさくおもはんなるべし。しかく聞くにつづりしく
おもひしといへるハ。よからず。
この人のいふやうぞんなげかしきなり　曰　こゝにいへるは。本妻の女の事
をよくするとおもひて。殿上人にいふ語也。然るを昔よりこれを殿上
人の語としたるハいかゞ。それハ此所にてしかしき説ぞ。その人のい
ふやうと有るハ。かの人にかきくれを。殿上人の語としたる人の。
ふその本説をとるたるのと語とするなり。殿上人の語としたるも
本意なべし。わしくは殿上人の語ともなる所を。下に。まとはね

きるんぞかえさるにやまうむをいつるさるがつり。きたなき。待ッ宜ど
のあるく。御ふいひうらんまハ、ものされるハ。まそらりめするもむ。やや
まりむなど。能ふべくもうらびそのうへらも殿上人の綾まそハ。うそ
といふ辞も下ふかく流布なし。おのをもさたりハ。殿上人の綾とん
ねて此ぞもめ下ふぞおるご衣ふ袖なるふねどいふ傍の。薄らきるからし
へりし此なやよく考ふをべ。よふうくふ殿上人の綾まそハりぬるぞて。馬
乃が綾あて。是てハ下の下ォ足ねぬりしていふへりまる辞也。殿上人り
えくといひて車よりおりまし也。さればれ此綾ま。まるが為てといふ下へ
うつしてんなべし。

此女は家なるさく　曰　をさハ。色文也。大納言経家ふゆくふ此女の家色文

くわしく無トホるさ能をいへども也。大納言経家り簾うんくをさふ此女の
家をるさく綾ぐく綾のをらびし。

おりま綾りぬりし　曰　まれ車よりおりまし也。よし上のとよひらくの綾を殿
上人の綾うして。是まらへりぬそ。殿上人の綾り。ふかくハ。上より
綾ぐきかなをんぞ。

あらべきのへより参る此　たちのまち　かりててよく綱子をうりせかきるをし
もしらをを今ふくうへもそハ。下ぬりれあそせらし〳〵といふて衣カサ
て文そのへといふなをもいかし也。

いまぞきるまるものまゝ　曰　是花よりし。官位もえハむずてし。
稀なるぞ　曰　稀なるしむるし。総角をふなべてやそねど稀なるまし

さしあたれば。嬉悦まに。などかく称さましがたきにかきおもし称ふとの

ことふにあぐもあり。また拙語り。称えしといふ云ハ。まべて つゝみに

いふごく。涼く妬忌むことにきこゆれど。時ふのぞくて。かゝく思ふ

するといふる見ゑだ人の意にむかひへ。いふことさするすゝめぐに如まにて。

そのおりしけりてしまとくちそしぬゞ思ふやうおとまをてくとも。

如くにする称もなうしいちう此。くちそしと思ふが。称くし思ふし。

さて称るまじくハ。さやうに称えく思ふるをいふし。

きくらやさべき人　日　叡上人こづかしおもすし。

あぶなかしふこし　日　此叡上人をことひ為るべく。付るん何もなきし

あり。本拙りそむべき紫もなしといふ何の志くてし。

まバゆき　歌の部　上なるに同じきし。

さるべきこと得て　日　あらしてあるべき所としても。

世人のまゝに　日　世人のまゝに。女のなびきあらがふし。　細流に世人のさま説

たしかなるハしぐり。

いづくにつけても　文の部　いづくにしてもし。

あまものし拙がなり　日　我身の人にまかするを卑下して。かくハいへるし。

細流に。夕無上の事とし。我性。おろかにて。癡なる方なる人ことなるハ。遠方

もてつきこともまさるにみて　日　人には恨めしく思ひながらつゝし

てその色を顕はさず流やうにおしえうし流くし。さるなかにんぐうしきし。

我久にハ。いつとくおもくし。　我名に別なるやうにことしふ注ハ。そぐめし。

おとがるうもなうれや　廿六日ひる　源氏ゐの、ゆう〜ぎふとひのふ
つきて、いるとよさて後夜中ばかりべきかぐやひめとなうりしよりし。
しる日の夜、ふる。
雪はなほふきわたる　日　雪はなほ〜ふおろしびきわたして白ふすまきし。朔日
ふきまひもよきかぜ〜なるしといつはしとぶり。
やまもとなどことをバうる　日　宗祇法ふ、ゐづ〜ハ、氣はふ白ばバ、さ〜おき
て、こいつるハ、ゐがごとし。ちをハちし〜。ふをバさ〜おきてし。
あうちちち〜ゐうる　日　長例の、ゐがごとし。
いちはと思ひし〜ほどふ　廿七のひる　あいをと思ひし〜女おわし〜ハバのを
あいをしゐえざりしと　日　しゐえざりしといふと、ゐぐやりなりぐ

世西先生ど、ゐ〜ば、上の文り尺しるゆ〜がらをうせて後まで。
あをれと思ふこ、ゐえざりしよりも、下ふ今やう〜志をゆく
きをふ、ゐ〜ゐをと思ふべし。
やく〜おきかと思ひ　日　ゆう〜と思ひハ、ふはわり、実ふ片思ひるふりてふ
ふハあ〜ば、こをハ、氣をバ深く据えてがをうせやるほどの女をば方ふハ、
おわ繪ぞゐをと思ふ。うをも片思ひといふ抱ゐりをと一種乃
片思ひうりていつる泊し。浦の、ふられをえしをえと、ゐふ
をもて、実り片思ひといふハわ〜ざるこ世志るべし。
えゐもの、きぐく　日　しるもつる男は女をしゐもつし。上り、さて西
もうう如はもしをもしゐがごと〜。或ふ、久兵の性、塔兵の性をえ

しらしぬ人とこそいへるを。むかでし。
されバかれさしたるものをところしらびしかりぬべきを 日 こゝより文ある所
が語といふ説と中称の語といふ説といづれもあれがこれさだめて
さだかならねを。こゝろみ何ふ旧義義のいちゞこれらわが所思る
ひかひなといふまでハ。中称のいふよりあらじを見て。中称の何もあり
上りハ。問答にて出でくるにてハ二人の語をむかふ
皆るひかひなといふいひてハ。源氏物語をかひよわといふ説よ
ろし。それとふよりて彼の二人の語をらていちんなハ。されバかのといふ
より行わ彼んやといふまでハ。る所も。中称の語なハる所に対
ひてかの女をさしたるものといふまじく。されどもいふも。人

のこくハおぼしつかバし。あらんやのやそよりきこし。とふ琴の音こそよ
らうかひそふべきをバといふまでハ。中称の語ときこえたり。きこゆめり
きんハ。るかの物語をきゝていへるやうに。中あし。この人もしれきもとい
ふそ。おのがこゝろの心とつふやうふ中あらバし。さていづれと詞ひり
といふよりハ。るかもさべけれど。上より何つゞきしれぬ。猶中称の
語なるべく。このまゝべしといふよりこゝろなるべき。されどこゝをも
さや中称にあらむもいふかし。
このもとしれきも 日 このとハ今こゝろづよ語をつる。夕顔上をさしてこ
ゝ。この心もしれきとハ。語といふべきかも。並びていへるハ。その心のほどの
ありがたきをいふ。さてこのといふハ夕顔上をさしたるなれども。

わもしきともしハ心くるしきを。此夕親告のやうにといふなり。
うらがなしき心なるべし 曰 我が心別人に心をかしやるとの題ひとあり
世中や 曰 やるせなきなり。
ものぐるし 曰 こゝろみだれてえてもかなしきをかなしてえても。物にくるふ事あ
るを。物ぐるひかなしひと云なり。

吉祥天女 六八のひら 霊異記に。聖武天皇の御世に信濃国の人
ちぬが。和泉国の血渟（チヌ）の上山寺なる。吉祥天女の像に添く思ひ
をかけて。恋しせしよし見ゆ。又狭衣の物語り。まさか流るハな
りけるを。いとかたじけなき吉じやう天女なるらむ。
ほうぶつき 曰 浜松中納言の物語に。みびたかなかぞもあれど。かまる

かなしくてうちやつれ給へる。いといたくにまさりぞおもへるんようも。
なまめかしくさあらかり。ほうぶつき。くふるぎになりてこし。
何する者ぞりやさん 曰 是ハ法華し記るなど。物なる者。信あり。何
する沙けきよい（ギヨイ）に入まゐらせんぞといふなり。 僧位さがり。
ざえがきえ 曰 ざえハ才の字の音なれども。物語りにいへるハぞなきも。
才智の事を云りで。俗（ヨ）に学問のある学問の好きなどいふ学問のことなり。
きこしに添えて。学問のほどくいふんがなし。
いくきまよぎぬ 六九のひら 紙筆沙まじへぞして。素みのこに事添といふなり。
さいし 曰 妻子をさしてハなく。書名をいへり。古き集の名に。世中を
いろふ家の某本なりとあるも。卯し歌ハ本なるを。某本とい

へ家と同じ事のよし。しかるに爰に志ハ又人でいふ詞といへるハいかにぞ。

なまよみあらん 曰 ここハ上に此よ人うかくとも爰に同じ。よろし。

くわしくきこゆるなり。

それ故しからバしと云侍る先生バ 曰 此下へ女たるもの学問などハ此

くても有りぬべきものぞといふことをふくめる語也。それハ上にいふごとく

しく書て人のみるにしろくハ何にかハさせ給ハんといへるにて此心也。

其のこともなん志さんすき物を侍る 曰 子細なきといふてん侍ぐる

きを上よりみつづきみち熟をもてよく考ふべし。何の一物も此き

よしにてハ学問などなき我いふとき。すべての事ハ学中にハ。

男にても学問なき者ハ侍るといへるて。まして女ハ学問此く

ことなることかたらんのよし。諸説みな子細といふことに泥(ナヅ)みて。

たゞうきにかゝれたるぞ。

さるがうがましくて 曰 俳優ときゝしる故なりても。西宮記ニ右

近衛内蔵富継長尾末継。善(ヨク)散楽(ス)。令(シテ)人(ヲ)大(ニ)咲(ハ)。嗚呼(ヲコ)者也。此に

きこえさるかへることなるとしといへるハむかしごとし。これが語もよろし。

ふびやう 此のうら 腹病風病二説のうち。風病のかたよろしかるべし。

春記ニ。長暦四年四月十四日云々。今日始(メテ)服(ス)韮草(ヲ)。依(テ)風病(ニ)也

とあるも。さてふびやう。ぶくしぬもやく。ごくじらねど。女のいふ

ことも詞かしこげ。此女をすべて。せうそこみるもかんなといふ

ものかきませぞといふなどひとて。つみの抽といひも。あるべくしく

ちりぶちちるさる波。そこさふかく出る。什物俵をべて。ちりし
の但儒者の但などおのおのそのんだ人を出て。人をつくべし。
なふしらハいそもを作むる 日 蒜を服しるるものいそそんづき物
くゐハまて。何ともしつるあだき但もなきし。
あひて 日 遅て出て。跡より人ふ遅りきさせて。ばちぶやるし。しまと但ふ。
什女おひ出てといるハ。ものごとし。おひてとハ。ぞろ〳〵ものても。跡より物
もるゆいふ俗なるをや
おいるふるし 日 俗をふ。ものんだやうふといふふ。よくいられて。さやう
のむるつまに女そいむしらハ。ものんどやうふ暑とそひのるこ
そをもるを。いふし。但ふ。まえやうふと。まるふとしる。みる

あるるぬるし。ものんだやうふ腹きるなど出ふいふ物。おいるふい
ふりしるる但し。
何を色 此一の物 何海り。淡とるるよろし。淡しとまる色。
みふらむをいふ但し。をを留て。拒とるひ。又いさえおろむやうの
んるどいるハ。ものごとし。ものの發とふ説もいとろし。
これより色づしきるハ。 日 うるもまるめていふ但し。
むげふまるどいるしびしもいるん 日 学問のまぢをし
まるしもかどいるむ 白 人のみふものふもう かどいるん色切べし。
ものしまるるハせのどもまるしもかどいるん如き学の人の耳
ふるる但。色ふるるまるざハ。おのづるおるるべきるふて。そづし

かゝ孫ぐ、そまふる物り法るべきてるあと行ゝびとのきし。かどあ
らん人のこゝづきてるるハるゝ。かどゝうんハそ女のすゑて人ハ芳の人し。
あよもむとゝ思へる人の　日　孫そ多あよゝしと。んふ思ひたゝるれる人し。さて
細流ふ。多よもむべき人の芳し。ゝ行るハゝ物ごり。こゝハ多れるゝい
ふよハあゝび。清島文のるゝ行いつる物ゝバ。清島多のおとハひもそ
やぐて多ふまつゝる　日　孫そ多あよゝぞゝ。思ひたこゝる人の。せゝそこ
物ゝかゝふそかゝ孫ゝるの。ゝ行る抱ゝる。ゝ行ゝぬるふつふし。やぐて
とハ。多よゝしと思ひ抱ゝる人ゝ。そのまゝ清島多も多ふまつゝる。
よみゝけゝるゝそ　四二ひゝ　清島多ふ多ゝよゝてやゝ孫し。
ものしたゝる物ゝ　日　かやゝひそ中ぐ。たてをゝ人を恨むゝこゝ

いふ河し。此河光ゝふ多ゝ。皆ゝこゝゝし。ゝゝ河ふ抱らしきしといゝる
ゝ。行ゝゝぬゝし。
さゝべき節ゝ多物ぐ　日　こゝそ多孫ゝち。ふつふ月のせち。み昇えんの
ゝ。ぐ。ぐいゝし。
物ふのあや光も　日　あや光とハゝ日ゝ孫の河ていつる文し。
孫を多きゝを　日　菖蒲の根のゝを。ゝふゝゝ多ゝよゝおゝゝる。
引ゝきとハ。行や光ゝ物の孫の河ていつる文し。
かゝき詰のゝゝを　日　かゝきゝとハゝ。べて詰を作る。ゝ。むつゝきゝるぐく
ゝていつる。雛節とゝるハゝゝ光ゝり。
注き物きいとゝなゝふ行ゝせ　日　あゝ世ゝゝ。指光のぐゝ。作ゝふぐ

つきハ一めにあハるゝといふてこし。さてこゝハ。五月のさつきにかく　九月のあん
にかしさ合せていつる也て。いそぎ糸内をんともる也り。からき詞を案ぜ
よ也り。さりて。他へこんハちらしかうきに。そまよ似つかぬいふはこは成せ
きこゝるし。いふはこハ返す成ぬるをいふし。

さればでもおのづからかく　旧　さればでもとハいかならざるさ日ごろどれども。
その日にて。専らになれて後に。よみおこせしつりとも。よかるべき物をのこさし。
おのづからとハ。まづ菖蒲の根ハ五月。菊の露ハ九月ぞその時節なり
てハあまれども。よしやその日ハなくて後なりとも。おのづからおくしかるらん
のこゝろをいふ。

字に後りして出へだ　旧　その事を後にみて見ゆるし。字にとハその事の月日

いふていふし。さてこと後に出へだ似いづちかへしてんはべし。さて
又此所の語。さればでもおのづからと。後に出へだとハ二つに分けてい
へるにて。後に出へださればでもといふこゝに有りける。かくて次のされ
ばでもおのづからと後より出へだとの二つを合せて。おくしからとくと
更なる語りなして。後に見へでおくしからとくとつづき。又さればで
もおのづからおくしからとくとつづくなし。すべてかやうなるなと
ろ。こゝらひなまでにかかるなどをおよそにみえまへり。すべての語のこゝ
をんはべし。よくよくまたハやはりなきぬべし。

などかなきても　旧　などかハかなくてハせん。さても何まうしとハいふこゝ
なり。さても何まうしとハ云の中に也ても有かしにて俗にに物

をせむしてやむを。まへにあるといふ意也。ならねどもよみてやら
む行もさびしてゆきといふなり。後撰也。
これハしのびこそ　日　これハしのびておもひあまりもなく。文まつりの
こゝろならねどハこれハといふにいふ。一本にこれにとゐりうちき
くにいひなるやうなれども。にと行るかくまき事にや。これとハ今
ある父の歌によろしきて新古今集をさしていふにされバ此歌より
よろしきこゝろに。わかりぬるもなく。るるも申しとこゝろ
よしかむりふべし。
さかしきいもひみあふくなりけり　卅三のうた　これハ又一人が中を詞
まで下のゆく行きするに。といふへ読むる深。源氏物の語をその中なり

うきことある物也。二條院とはといふうたハ源氏物の詞也。
家によろしかれおもしろにも　卅四のうた　垂花に紀伊ちが詞よりよろし。
ありけるにていふ也。おもしろきとハその本下なりしろふとの縁あるにつき
ていへる也。
よるべのより出ある山づき　卅五のうた　後徳の下流をうけて。古へ流を出る泉也。
思ひあがれる。辛しきふこと　日　定頼を。今ハ伊勢大輔が書たる家に。
むかしといへるハいかなるやうなれども。これハ思ひあがれるやうにきく
あひしを。人のむかしめでてあはしおもひのこゝろなればこそてなし。いよ
の分がむかしめでたるも思へどさになるべし。
やきて　日　猪名の説のおそし。後撰に。その例をいふべし。

ものや　ホムのミ〳〵　身(ムヤ)をし、ヲを、たへむといつる侍る事、さてむとゝ
ゝ、ほのかちら〳〵ゆふ方ゝ、ゆ分をいひなる沢、毋家を侍りて、毋屋(モヤ)と
ゝ、そハ毋をおもといふ所ふ侍りてゝ、おもと屋の義といふ
説ゝ、さて身屋とハ屋の内の真中ふ立て、主(ムヤ)つる所ゝ
ゝ、ゆ分をて　月　ゆ分をハいやゞ引えぶれゝ、ゆゞむとゝ、ゆ分
をゞを、ゆ(タ)〳〵といゝ、侍るし、河海をゝゞめ、毋流
孟陣ゝゞふ、ゆ〳〵を、方のゝふ臣ゝ〳〵ゝ、ゝ、ゝ、

殿上ゆるす　日　殿上しそこなひ侍る。殿上のこと、いふもをこがましく。

伊勢物　日　上のいとゆゑなきの給はせたるふまわて、花をふきゆる所をつて

て、かといつるしと、ほそき枝をたをる八、ぬぐり、実をかゆるを、上ハ、ちと

いつるし、さべき人ハ、かをもとめ、いとゆゑつけるを、ものしていふこと

きなり。ほかの人をふ、をのをの大臣を帥といふも、次官ハ、カミ長官ハ、ミカ長官といふ

例なり。そこつ也。又、太陽、かをもとめ、太陽、をとこ、

ちかもまうのぼりたる。　紀のきのぬぐ八、いとふ、ちきぐ

ち、いとゆゑなきもの、ぞむかしと、京ハ、をもとめ、ちかをもとめ、伊

勢物ハ、ほかの事ハ、ちハ、ハ、ぬぐ、ちよりいつる男ぞとよ、

ちぶきてのゆゑ。　ほそ、ちよりいとゆゑなきぬぐ。

又上文、ちかもとめ、ちかもよ、ちかぬぐ、ぬぐ、ちし。

みな下をふ、ちふ　八の巻　宮ふ、ちふ下をふ、ちふ、ちふ、ちふ、ぬぐ、源氏

ゐ、ちふ、ちふ、ちふ、如ぞ、ちを、ゆ、ちべき事ふ、ゆ、ハ、怪、ゆ、ちふ、ちふ、ゆ、ちふ

ゆ、ちのこと、ちふ、ちふ、えやまうゆ、ちふ、ちふ、ちふ

やゝあびゆもど　日　茅水一盞ふやゝ。あびえゝる事多るべし。
ゝゝふ人ゝゝと　日　ゝゝふ雅ふうけうけん人の事ゝゝる。えよびらるし。
けうきゝ　四十五のひ　京師のゝもし。何ふけうび。人ゝびゝ多何し。
やゝゝのゝゝまふ　日　曉ふれむうへゝ始きよゝいゝんゝそゝがゝゝうび
うを始つゝるべし。物ゝざれだ此ゝうゝ。
ゝゝもゝぶふ人のゝゝ　日　ゝゝもゝひゝゝもゝくゝ始人ゝゝんゝゝそゝもゝけうゝゝふゝ
てゝけうゝゝ始人のゝゝんゝゝよゝけゝゝふゝけうゝじをゝまゝてゝゝとゝのゝゝし。
あゝゝしゝゝゝ　四十五のひ　枯多しし。下ゝふけうゝび。
きゝゝゝきはゝゝゝそ　日　ゝゝうにまわる女ゝ。ゝのきゝゝを
ゝゝつゝゝゝふゝてゝゝて始ゝゝて始ゝゝいゝゝし。

ゝゝるべきふや　日　かやゝうふ始ゝゝ思ひて。けうけ始ゝじき物ゝるゝまひをゝ始
ふゝゝと。物ゝべきふ事ゝ始ゝ国孫ゝゝゝ。
始ゝゝふゝ始　日　始ゝゝゝゝゝゝゝし。阻ゝゝふ始ゝゝ。ゝゝゝし。
ゝんゝゝ始ゝ　四十五のひ　既ふ実ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ始のゝゝふゝゝゝんゝゝゝれゝゝを。ゝゝゝゝハゝゝをし
きゝゝ始ゝんゝゝゝゝゝし。始ゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝ　日　ゝゝ始のゝし。孫氏ふゝゝをゝしゝゝ始ゝゝわゝしきを。
ゝひゝゝゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝ始ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らなくいふなるべしとぞ思ふ。

又形ふり形ふのちせもやとも云 四 そのひてそかく〳〵ふるきものの

ふるびたるなるべし。後うハ又さとりなくびと云事〳〵形ふやうも

あるべしとぞ思ふ。どうがんを形ぐさもむべきふしいるしおぐさもむる

さ。保氏点ふなるべけるきものふるびつゝが加ふ〳〵紀を形ぐさもむる

形り。花さふだんぶ〳〵おろう形りさとそ云〳〵とうるハ中〳〵ぞ又伝の

海ふりきとうるとうさ形るうるの方ハ百紫ぶふかふふ人さいふうる

ふ挟形乃後俗の山の後もうちんえ〳〵いふ方法おぢえるぶ

へきるべし。

いとかりかり形うる紀孫のにはとを 四 歌ハ文のうる身形るバ二〳〵び

と遊見なるべきふあるざ挟ぞうひかく〳〵ふを形く〳〵一変遊ものう

しハ〳〵ぶかりそ見ぶうきるる繋〳〵いふ心。定塚の人結挟う〳〵ぶで

う。 結き素意二〳〵ふ巻の松のうるぶ中〳〵ハ遊ぶ〳〵ハ遊れぞよ法

ひう〳〵歌ふふ。 宗祇注法し。

さ〳〵ふへてハいうぞうれ文をぶ〳〵ふう 四十三の歌〳〵 いうぞうふ下に。ふと

ぶ後〳〵ふう。中ふ中〳〵ぞハ法う〳〵のうぶ。ふ形ふいうぞう〳〵いふふ

ふ。保氏点のんを〳〵ぶかいつる法。法文〳〵いふうりハ地ふりいふ法ふれ

ぞ。紀ふの堺あるべうぶバし。

ふう歌えきふり 四 倩注ぶ〳〵ふ。

ふ身形うふ紀 四 身形うふふハ文の定ふる身ぞ。保氏点ふ遊〳〵

氣をうしなふ事ふし。強くあたるでハ。強きはわまりていきをつき
ざるをしらりかをのハ別也はやうきはなし強くあたるを
をゆるし。法ふいろ〳〵はやんをうりたつきていつハ上流ふるれども
ちと〳〵ちうく移也バ　日　こゝハ行事ふま繼ぎ事をうりうてるゆ〳〵
もうををて。うりうてちうく移るし。新拾集といふ和ふわるうう。
秋風ちこゝ吹茅ぬゝわるも同じ。　河海ふ事をしとちうよう
しゝうざをうふしきんもゝちうふうつ。細流ふふをゝくゝとわるハ。
うれうど。

こさうじはかゝうより　四十四のひ〳〵　如こい紙し。おふもうてうり。世ふ物をふ
もう。皆同じ。芝ハあうと陳ふ事。うをき紙一を物也バ。おのづゝ

彼をゝをしるうちうつ。穴ふどのちううりうえゆるし。　上　といふ流ハと
ろし。小陳ふるといへどと。上ようりちうるはえゆるゆうりをきゝ陳ふも。
ふべくもちうゝ。ゝをひをうをも。上ようりえをふも。ちうをうようりもよ
くゝうゆべうをバ。をそうふゆるいうでうえん。
をうりをさ海をる地うゝう　日　をうりハ月はわうをし。をさまるハきゆる。
なうり。新ふ地ゝりもちうを物ふをちうをわうをうてえゆる月の新し。をゆ
のをうう。海ゝふうゝふいうるゝをゝ。ちうゝ移るものし。
行ふをきをゝ。はゝ　日　をふハ。差別をるふを移をゝをもし。
なふいゝ加きゆえて　日　なふハ。ちうるまゝ。ゝをるをとふふをゝ。ちうゝ移し。
婦をるふうのをゝをひえむ　四十四のをゝ　をゝうゝいふゝ紙。のうをゝひゝ

ちこうまは源氏物の作せを侍るなるかぶいつかう文ども敬ひうるに
何りてとゝまるべし。今世ふるし。敬ひていふ何ゆへ、おのゞ方ふも法といふ
云ふ所なるべしぬゞひあるべしむう。
意しまは侍るべし　日　えべて意しまうはうべしといふも。ろくくも
あるべしといふまとし。よりしといふまとしといふはまどり。
世はるるひあて　日　河海が白氏文集引きるはまるこなるまど
もこまはうあるべしもかの本文をまていつるふもうはうべしで世
中ふひるるうるこまを世はまるひといふし。
源もいできぬ　日　もといつるは源氏物の名文をおて小兎が出来しるふ
あはせて源ともあり。

ふ考えへ行をでぞ　四十云のもの　思ひまて移るまぬし。注ふ源ふめもうそ
称でといつるはんはぞ。まへまは見はあそまるうへふ考えへあるまをい
へる河し。あふといふを見の源のもし。
ごろうえぬまくせ　日　更級の書ふなるまるがりはうき身なるふ又源
氏ふはごろうはるまをごましるはうふやうふ思はまるまはんはぶ
うきまくせの源るまし。
侍ふしやうしまるん　日　宮城ふんをかまてし。
ふつうはる　日　太つうといふまて物の太く丈夫なるまし。ほう。
ぎまくはんしといつるは後うは特ぶしるまふまてうまかるはぶ。
いまつきはうるべく　四十七のひう　更級の書く定まはるふまて。る者の

係氏ゑ物がたへ出たるり物がたりをしかるべきと心。妙色風
「流れとしいつる住き。ものがたり。
ぐふあべるべしやとと 曰 家おハ。よの中ハ人の老でゆゆるも家ふし。
思つわ〜家〜えの 曰 係氏ゑうり意をすわ〜るべ。きてもつる海
じれとしいみ〜〜うきるふ思つわ〜。京塔の。ちゆの家〜きれり。
係ふ係氏を思ゑゆ〜ハわ〜ぐるり〜れるべ〜と。いつるハ。う〜ゑハうれ。
ゑとうふよるで。ゆふ。ふ。ゆ。ゆ。ゆ。 曰十八のひ〜 ゑとうふ。ゑ。ゑ。ゑ。海〜〜うり
へ〜ゑ。ゆ。係うゆ。ゆ。ゆ。

ゆゑなくかるよし説　曰　るかあつぐるよし。注ふ不用不要なるなり
を出して、まことのことを解とるハみるかあつぐ。字をさとるべきなり。
之ハ物の説、又不論くちれるハ詩をうらなし。
ちかぞなるしぬる　平なり　上句ハ、文領の書と定まれる、賤き名乃
うさふし、人のん、指統かくなくなくなり。上の文より、身のおづしをいとつき
あるべく思ひ、いとかくもの定まりなる身のおづしうらでうなる
ぐうるうとし。住ぞとふうぐよりを定まりうる身なるべいとのいつる
ちかあちぞ。下句ハ、うるふとうるまを思ひまもるよし。さて上の句
もきゆるも、夢本なる縁のうらし。
ちちまもるく　曰　不無にあづをし。ひちきなくとつふ住を、うなるぞ。

かくこぎふくなり　曰　和のうあむさくくして、人をもかをつぐひめて
行をバ、うる和へ入をなくむ。ひまりおそをきよくやをふて、和
のうるなる原氏ふへ恐をうし。指きの説、中くふうし。
あがうるうぞ　曰　和流り、ぞしハ紫式アをがをしるをうをうせど
のくえしくうるハくものうり。をくをうてあハうくびぐをくくふ
あがをきるる何うて、うやうふ後を待へうくう。当和後ふ多くるなし。

空蟬

おぼつかなくふるとし　二の句　孔子を字に孔子を字に孔子を字に

さかし　日　さやうぞうし。かしこハ本下をへて行とゆきをとし。注ふ。
きとかくん〳〵しといつるハ。とゝめがつる。
ふゝ〳〵とゑろ。ゑまてあと　七のひ〳〵　屏風をかくうへ〳〵とよせて。ゆをとろ
ろを高〳〵とるし。又ゑろぎてハ。風の吹るやうをとべきをと況。高〳〵とるとふ
てるをとべし。　人ある方ふ。とるし〳〵いふ傳注をむがてし。ぐ源氏
ゑのへかふべきをとをいきんとをし。　括ふ。〳〵ゑろ。ぐふをと
をゝ。をとをゑろ。ゑまて〳〵字〳〵猥とるうして。ゑのいをとをいへとどいうど。
下ふ屏風をゑろ。ゑまて〳〵いつるを。をとをし〳〵いつるとど。ゑらど。ゆゝを
よせるかの屏風を。火あうき方ふ引ゑろぐるし。
爰はやう形ることを　日　些をもど下ふをとる何をて。いうど。のゝ〳〵つる

ぐき結をるをや。
身ぢ〳〵き　へのひ〳〵　退の字ハ。ぢ〳〵ゑ。ゑがてし。
なかり〳〵ゑく　九のひ〳〵　ちぐ先ふうぐ〳〵びのをきふし。〳〵つる注ハ和ぐど。
花ちふ。よのつゆはちあふざわふかゝ〳〵ゑんうるべ〳〵とつるぐよろ〳〵き。
ちべてけ何ち。結ゑふ。なんのすもをいなんでもおいゝふをし。
ぬぎをとべ〳〵ゑりゝゑんゆゝうゝとぎぬを　十はひ〳〵　一本ふ。〳〵つるぐよろ〳〵
き。ぬぎをとべ〳〵ゑるゝハ。源氏ゑハ。ゆゝうふを和ゆふをぐをとバ。ゝゑ
ゆゝいふ何ゆゝべゑれぐし。　括をふ。日本紀の垂髪（スベレモトリ）于背を引て。
ぬぎ〳〵れゑるゝいふんし〳〵いつるハ。垂字にあげ考ゑがてし。衣を
ぬぎをとべをゝいふゝ。いぐゝゆゝをとハゆ〳〵をを。

わらびうゝもゝへ　同　わらびを。俗ふいや。ゆうすでとゐいゝいふなり。
きしゝうハうゝぬかもの　ゝゝ　同　ゐくハわゝぬゝをどちうゐゝ　背也
のうるきをしるいびとていてるゐし。俗ほひがゝし。
うへふやさゐゝひゐひつゝ　同　或ハふうへゝハ主人のおゝゝ面を取ゝき
して。ふゝもゝいてるよゐゝ。　俗ほふ。書如をうがゐゝいふ羽ゝゝいへ
ゐハゝがつゐ。うハ書如をうへゝいふゐてゝし。次の文よゝとふ付つる
ゝいてる。下ゝ　モ　對へゝゝんはゐ。下ハ下　モヤ　ゐし。
まゝゐる人を　十二のゝ　一ゝ　ゐもがゝし。
ふうつきはゝ　此ふはる。接遠ゝ。伊勢集古本ふをきるふや。
今考ふるゝはし。うつをゝ沈ふゝ考ゝゝゝざゝバ又ゐを

ふゐやおきはん。此ふの〻〻有。古人おゐゝ損じをゐゐゝいてる。今思
ふゝ。此ふ伊勢集にをゝハ。ゐの海ふ足ゝゝゐ。後の注ゝゝハそのを
ゝをバ取ゐゝ。ゐゝ。ゐの海ゝゝゐて以へゝバ。伊勢集ゝ
うゝゝいてるゐゐ。ゐゐゐがゝ。ゝて。ゐの海を。古ふ沈ふゐゝ。ゐゐゐ引を
るゐゐゐびゐゐ〻〻ゐゐゐバ。ゐゐゐはゐゐゐゐゐゐを。此
ふゐ。ゐの集ハ古本ふゐをゝ。ゐゐゐも思ゐるゐゐ。此物語の例を。
古ふを今ハゐふ。て入ゐゝゐはゐゐバ。ゐの海ふ。他の地名のゐふ
例ゐゐをうぎゝゐゐハゐふ。ゐゐがゝ。又ゐハ元愚の賜苦ゐハ
うゝ。此ハふ。ふ。ゐ。伊勢集ハ古ふ沈れゝう紙のゐし
ふ事ゐへるゐゐいて注ゐ。ゐうがゝ。此ふをうがまるやう。ゐで

定家の卿などよみ給ふ所なれども、是べて仏神のやう、志ある人を、今一度行ぎやうする例を引きて引き給へや。

夕顔花

もゝ千くさかなる　三の巻

ふ、俗家ふ志ゆゑをぬしいふさし。ほゞと、棟家ふ人をいふて、ゆゑ引きをい

ゆゑを、棟も宗も、言はゆゑハ一つるべきなどこゝろ、家ふよりて

解べき詞なり。

さもしる　日　俗家ふ志やもしるといふ詞なり。ほゞと若しめづらしさ

そぐふといつるふゆゑを、又さそぐふを、出ふ、る者へ、ゆゑを、出ふ、る者へ、ゆゑも、ゆゑし。

枝も引きを引ぎ引きる花を　四の巻　夕顔の枝を蔓にて、おかれを

びゆゑ、る拍子を、よゆゑ、ゆゑなりふく、かるべきかぶ、ふ、ゆゑを

忘てなれといふし。

うゝとのゝるハ　五の巻　やうけうゝゝハ俗家ふざん孫んるゝといふさし。

かゝる　日　住みを、ゆゑ、ゆゑし。まゆゑを対しる詞なり。まゆハ、拍のゆゑ

引るゝかゝるゆハ、ゆゑ、ふもゆゑ、ゆゑ、ふもゆゑ、ゆゑし。さて、云ゆゑハ、拍の長帳序帳

ゆゑも出るゝも、ゆゑ、べ。孫ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

なりて、或おうていつるごとく。
おしねべうぬ人乃はもくせ　日　かくまで世ふるごとを結ぶ源氏ゐ乃浦
乳母〳〵ねまるとハなく〳〵なるゝぬ宮業ぞといふし。　ほふ源氏と
乳母の源の清ゝぬ〳〵いつるハうれるぞ。
ゐ　ちゝろあてふゝ　ゐのひ〳〵　源氏ゐを夕ゐのむふゝ〳〵へゝ今夕ゐゝ竜
も光もそひていと光でゝ〳〵えゆる夕ゐの光ゝなゝ〳〵ぬ人とハて
ぞ。ゐあてふ源氏ゐゝ〳〵えなりぬゝし。三四の白ハふゐゐの夕乳のむ乃
光をそへるし。ゐぬ光ゐハうゝび。　細流ふ源氏と推（入井）〳〵るふより
て。光の光もそひゝるゝし。ゐるハいゝ〳〵きむゞゝし。二の白ぬてふ
をそふねそび。

やう光ゐのそけるゝ人のゝ〳〵　日　こゝもより。惟光ゞ源氏ゐふ中に結ゝ
てきゝふゝいふまでハ。ゐゞもりゞ。惟光ふ結ゝ〳〵ゐふて。ゝ中にゝ。
ゐゞもりゞかやうにヤせるゝいふし。
ゐよりてゝそゝ〳〵　七のひ〳〵　細流ゝ。此五ゐゞ。ゐりてゝそゝいふなりゝ
ゝゝゝゝりそゐもゝ〳〵ゝかゝゞ。ゝゝしゐぬゝゝうちまうせてハ。ほのゞく
〳〵ゆしるを。又思ふゝ。宮の白ゐゐゝゝよりゝゝるゝ〳〵ゐゝバゝゝきんなゞ
まべきふゝゝつるゝゝうるハ源氏ゐのみづ〳〵ゝゝゐのゝるゝのやうにゐゐゐハ。
もゝハ此ゐふてハゝうぬ簾ぬちきゝうぎふゝゝ〳〵女ゞもをまして夕ゐ
のむゝゝゝゝへゝるふゝもゝゝ〳〵むゝ何ゝゝゝゝかゐまゝるゐふよりゐゞゝ。
ぬゝへをバこゐゝかゐゝゝうちゝへゝて若流ゝ。ゐゐあるゝゝゞゝゝ。但し

初二日はまゐ、住のごゝろ方、まさりて哭ゆ。

はんざゝはもゝ月ゝ行 日 指出さゝ、此何りて、儀うゝぞ思ひぬつるゝ尺

ゝりゝいつるハいろゞ、こゝハうはは島雨の住方へゝんざゝておろゝまた

ふゝのゝはもゝ月ゝ、大武の乳母又夕朝ゝはもゝろゝのるゝをいつるなゝ、

はんざゝはもゝ雨ゝくハいつるふゝつゝをわゝ。

ぞふゝろ紀女ゞもはもゝ 八の巳 ぞふゝさかゝづゝ人伯先りといふへゝ

まり、上ふゝ月のゝろゝひよりゝ、猶ゝ紅人うんゝゝといつるをうきて

ぶゝとハいつるし、住ゝゝぶつり。

まけてやゝ雨んを 九はひ ゝこゝハまけてやゝ雨んゝゝきん

をゝやを一つ為ゝゝとをゝ。とふ侵ゝる雨るべゝ本のゝゝ、ゝて八侵ゝのゝ

かゝつゝゝはもゝ人を 日 はをゝ。もゝ雨ゝゝび、ゝの侵ゝるべゝ。

かゝゝち雨ゞ孫びゝれゞ 十の巳 ゝべゝ孫びゝいふ言ハ、ゝびのゝ、ゝの

畏かりゝる雨るべゝ。今ゝはもゝふゝ、人の容を、ゝゝ、ゝゝいふゝゝ

ゝり、ゝゝりふゝりゝのひゝゝといつるも、稚幼(ワカ)きゝゝひのゝゝゝ、ゝ

ゝるゝゝ雨るべゝ。

ゆゞゝゝゝいゝつゝゝ 日 こゝハゝゝゞ、伊勢の雨はゝ事ゞゝをゝはもゝ

おゞをゝゝゝ、雨陽ゞゝゝはもゝるゝゝゝゞ、ゝて、まゞゆゝ、雨ゞゝハ、

ゝ塚のゝゝ行ゝる石し、花ゝふ、野陽、萩の葉ゝゝ行ゝるゝゝ、雨ゝ、

ゝゝゝゝゝまゞ西ゝゝゝゝゝ行ゝるハゝゝ雨ゝゝ、ゝゝ葉ゝゝゝゝゝゝ

ふゝいゝゝ乃ゆゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

〻ゐるをや。

始まえやうゐるおくれをうゝ　日　実躰なる事孫ひとる人をといふ

とし。侍従ふ保ふ忠節ゐ結ゐる人といつるハ。とがつ。まとゐハあ

らぢ。ゑかゝ風流ゐる人ゐるゞゐバつをまづゐゝも思ふべきことゐれ。

侍ゐ人ゐゞやうゐる義をかゝまづゐゝをづゝゝ思ふをこゝゐゝ

きゝゝ。えづゝゝおゞをし。学ふとハ。元様の保氏ゐふをなることゐ。

恒つゝかゝぬ才と思ひそづゐをゐきをおとゝゐうとおゞせる何し。

されどよそゐわゝゝゝ　土のひゝ　上ふいとゐゝかゝゝといつるも。冊ゐ地よ

ゐいつるし。さそゐをとゝをきていとゐゝきゝゐをゞも。保氏ゐゐをさ

ゝもおゞさぬをいゝゐるゝふゝとし。住ふ今も物の先ふをおゞゝ

えさぬゝハいひゐゞゝといつるハ。なの先ゐゝんをいとゐゝかゝゝをい

ふを。保氏ゐのんゝゐるゐゞをゝし。ゐ保氏ゐ物んゐゐむふハ。

いとほゝゝおゞをものゝゝよそゐゝゝゝなどいちでハ。ゐ

ぬゝし。

祝ふゝげゐるをゝゝゐふゝ　日　をゝきふといつるふんをつくべゝ。

よゐをゞかゝ女のほんのゝをゞゐゝふをゝをゝも祝ゐハぬをゝ

きゐ。中ゐるゞふもゝゝさむゝをふゝふゝふ祝ふゝゞゐる

ゝゝきゐゝゐふしゝゝゝそゝのゝをれゐひゝも。祝ふゝきゝふ

もゝゝゐゝゐふしゝゐゐをゝゝみゝゝいつるほゝゐゐをゞをゝ中ゐゞ

ゐるまひゝゞ保氏ゐのほをゝゝゐをいゝゝゝ思ひをゝゝ。

そふらひてハ　十二のひ　細流の從ちつしゝ先り。

ゆゞ敷しとゝふむとゝ　同　ほふ。若恨ゝ旬を引まハ。そゝふ〳〵敷

きこゝし。けすり拾きふ。いとゝ

ゆきとゝうちゝをゝ〳〵を云〳〵　十三の日〳〵　これゝ。代中ゝ。ゝゞ。ゝ。ゝ号ふべき

ものぞと。冊子地ゝりいふし。

姫光ゞゆづりゝ　同　夕敷の宮ゝすハ。姫光ゝ作せつきて。まゝせお

き給つる所ゝ〳〵いふし。後ゝふこゝ光ゞうをゝりのゝゝふ円ゞ。傍

注ゝ。無勇ゝいひごゝなりゝ。

なゝ卯　同　ほふ引ゝ。百紫ゝ長ゝ〳〵ゝ。ゝ。ゝ。若ゝ。ゝべきゝ。

ゝ近の云ゝゝ　同　ゝゝゝ。拾きふいとゝ。

いそぎゝ。ものハ　吉のひ〳〵　花宴ゝ。ふこゝ。ゝゞ。ふゝ。ものゝ。ゝ。

ふ。月乗ふいで〳〵。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。紫式部日記ふ。ゝ。ゝ。ものゝ。

ゝゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ものハ〳〵。ものゝと。一つゝて。

ハ〳〵。ものゝ。ゝ。一方ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ふふ。ものゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

車をぞ。ゝ。　同　ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

格の何し。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

のゝふを。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ものゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

とかきおもへ　日　夕新し。

たゝ〳〵ときまかりつるとく　日　仕下ふをもゞつゝるほゝ。

きさゝ〳〵人のゝ　十四のひ〳〵　人をきさゝ〳〵る者ハいふも氣分を抑くれ

くゝんさるゝ物るかゞく歩りかて。抑きまををゝ〳〵ん八うゝき

ゝ。ふふまてゝ八ゝし。保ふ原の方ゝ人ゝいゝをゝかくせゞゝいつる

ゝ。ふゞてゝ物り。

人の言ひいゝつゝゝ　十六のゝ　ゝさまくゝと八やゝゝふ

おかゞきゝるゝゝ。苦ゝきをいつる日ゝやゝゝふおゞゝるをさて

いつゝゝ八ゝゝ。保ゝるゞつり。

ゝをゝ〳〵ゝゝをゝ　日　かゝまでゝりおく。ゝびゝゝ物ふゝ八いや

ゝゝ小氣ゝ毋ひゝふゝゝ。ふゝ〳〵つゝゝゝゝ。

ゝるべきふゝゝ八　十七のひ〳〵　或物ふ宿業ゝてゝゝ〳〵ゝゝ。ゝ

物るべき宿緣ゝるべゝゝ八。ゝんゝゝゝるべきゝ物ゝゝゝ。ゝやいゞ八せん。

ゝいふゝゝをゝゝる日ゝ。

いゞいゝゝんやゝきゝゝ　倩保ふゝの家居てゝもゝゝゝいつる八ゝゝゝゝ。

ゝゝ八ゝゝゝ言物ゝゝゞ。ゝゝゞ保る八働ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝの居居乃

ゝ。不知又いゝゝふゝゝゞ八清ゝ。ゝゝふ日のいゞ八居るゝゝ居居ゝ。

古書ゝ彼家ゝゝゝゝゝゝゝ

よろし。細流説なり。

きりぐすとぶまろかふかう　古はの壁の中ふなくハ屋はの内なるべ。

る近きて物ふかそとふるを虫ふかなるひぬるハ殿の屋くてからべ

もやいまだ不きなし。細るふ此屋どハ狭きなふ屋ふかく虫ごもの

ろ。耳ふさ〳〵ひて〳〵明やうふる近くおがもし。細流説ハ。ふく

ひ。るを〳〵いるふりなるべ。

んぐそうる　日　俗云ふ氣のあるいふとし。蔦夕色上もむぎふ氣

の好き人なるべし。住あるぬるし。

なもてるるでハきてえで　兵のひ〳〵　ぴもどなきかゑてもど此離て

もむ〳〵いる。皆ろし。下ふ〳〵ぐおきかびるる考ふぬうづくぐ考

ゆる〳〵いる考て。なる此考ハ。ずしざるるきをや。

なるもる〳〵らふのどしし〳〵　日　仏礼る考ふて。みるきさ〳〵じぐ考

知りふし〳〵ふ住ハ。ぐて〳〵し此なを唱る此考て。来安を祈るる〳〵

を知りふるふてそうる。

かやうはもぐ好ぐ。る〳〵　日　やうはもぐとハ。ふよむることいふ。ん

もてなきハ未熟なるよ〳〵し。そかくいるハ。実ふ此ふはもろ

く好きよハ。ぐ。例の紫或紙ぐ。例ふ。ぐ。ぐ。

ふ〳〵なり。

いるよふ月ふ　兵のひ〳〵　入り〳〵ちりれども。いまだ〳〵で。ふ。ぐ。ぐ。

かどの月をいふ。出む〳〵て。ふ。ぐ。出ざるをもいふ月ぐ。ぐ。さ。ど。

陰(スム)なし。さて女を男ひやをとこ。一年に女もとこうるぞまことなる。
いとよふ月ふくいへとバ女もやをとこ。畑をとこふべきなとバし。
まぐやうやうなるすをうる　月　係文の義に云ふハ和名抄
ゑ山のえだをうる　十三のひ　神二白ハ係氏名のいう所なんまていづこへも
てゆきあふこゝをもとでといふことのことへ月ハ兄弟のことへし。
細辰ふ山の陰を月をかくとべき所とハをとでとなる。をとハ
をまいをんん　月　伺海ふ經営をとなる先し。そを先といふを三位をさ
んを陰陽をちんをやうをいふ所し。敬命をとるハ心がをとし。
をちをてぬ　月　いよ〳〵ふをちをるし。
うちなをを　月　うちなふを。畑のをのをり。をろひをるをし。

おきなぐを　月　ながハ長し。中ふなををるをいふもをし。
いとをうをふなりふをる所をふる所をる　苦のひ　ことハ乃ふ係氏名のをを
へる羽をまぐひて。字〳〵誤まるをを後をべし。をを所ハ月ど倍のつ
をなくをなるうへふをハ地の細をれをかををどいふ云なるべき
所をなををるををしをとバもとハいをうをぎふををををなど
ぞをきをんを〳〵。
べをなをう　月　伺海ふ別ふ建をる屋し別納ふて大答おこなをれをるを
おを〳〵ふ寢殿をとなる。細流を。雜舎をとなるハいを。
ふ所なるをとなる　月　をきふ光なるをとをハ〳〵をハ〳〵光をてぞをきを
所今をとをとハ光をなきををををとををををし。をハあくまで光あ

ものゝ見わけがたく、たゝゝふ逆ひてかゝゝそのうゝ波いふてゝけさびし
今は雪うもとよくいるることし。物ふ美花細流等ゝの住を此さを
はなれて、光わりゝ天しハそゝゝ発ぞゝいふゝゝ笑ぞゝるかゝ。初の句
をバをて、ゝたゝゝびゝかふまゝびゝかゝゝおゝ迄ゝる抽し。但ゝ又の義と
て、ゝゝそゝゝ明ふ天しハ抽の数ゝてハ拾きぞゝゝゝとゝいるハゝゝ笑
ゝゝ。ゝゝゝゝゝそゝれふゝゝぐ拾ふざゝふ光わゝ拾ぞのゝゝ又しハゝゝ光
ゝゝ。ゝゝ天ゝバ。ゝゝゝゝざゝふいふべきゝゝびゝふゝゝゝゝゝゝゝ。ふゝゝれ
ゝゝゝゝゝいふ拾るべし。拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。伊の用ゝ拾きほし。

ぞふうちゝゝ　日　伊ぞふゝ。源氏ゝの方ふ夕寄ふゝゝゝゝ光ゝゝゝゝ。

寄ふ光やいふゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
拾ぞゝりなゝゝ拾りふゝるれ者ゝゝゝ　ゝゝのゝゝ　ゝゝハ源氏ゝみゝゝゝゝゝゝ
れすをのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれのゝふゝゝゝ後ふ漢ゝ加へゝゝゝゝ。
伊仏もなゝゝゝゝ　ゝゝのゝゝ　拾きふゝ色をゝゝふゝゝふんゝゝゝきさし
むゝひをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しきまで拾るをゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝと拾るゝゝ拾き人を　日　ゝゝふゝゝ拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さいへど、　廿二のひら　信ふかくいふてもなんがいふてもいふと同じ云
なわ、さいへどと同じ、必ずと上かうなる時そもいふ詞し、
右道をそへてのそれど　廿四の巻　世もたといふ詞、下ふう法師法師いで、
おかいどの〜ゑ〜ちゑ和尚様　日　こまをもちゐ門よりもれ役ゑ和尚
あつるし、ゐあさぶるよ〜ゆてを奏し行るめとゐるかてきる。
かっこう〜もとゑん　廿六のひら　或物おかかとげけ物〜しといるよりし、僧侶
さゝゐがつわ
さゝふたゝ物〜ゑ〜　廿七の巻　さゝゐたのさへどいふへうゑ行
とゑてのさゝふよう〜好るべ〜しゐと物くハ難ゐ〜ゐ、所侍ゐ〜と
いふとし、孟津又湖月の一説ともふ侍し。

なふふたとぐ〜〜〜ゑ〜　日　葬のおどのる御保氏ゑのおがつゐ物くお
がし〜ゑして事物〜ゐなせ物どゆ〜〜ゑてのさまふゐふ何ゐて
さやうふあがつゐ物くゐあがゐべきゐたとぐ〜〜〜ゆ〜べきふゐゐ行
ゐまどがんやゐ〜〜ゐゐ〜し、ほゐるがへわ。
ゐいぐ〜〜ゐ　日　ゐ〜ゐまるゐるゐハゐへどゐゐいふほハ退ゐ〜ゐんゐ
ゐ氣ゑがゐゐし、什河、ゐふいつるがおゐ〜。
ゐで今ゐうゐをゐでハゐ〜　廿八のひら　ゐで今のゐハ今和葬むゐゐ
ゐ氣好ゐどハ今ゐうちゐゐんどハゐいふゐし。僧侶、魂ゐ魄ゐめゐぐハよし
ゐきゐ〜し、ゐで今ゐ〜いふを、今生ゐ〜ゐ〜ゐるゐやゐゐゐとゐゐわゐ。
火ゐわゐゐむ言て　日　保氏の侍ゐふよわてゐいふ侍いで。

かゝ〳〵記てくをゞさる抱ゝて　四九のひゝ　かゝるしきゝハいつゝもさゝ抱きば。
そゝきハそゝきまゝしゝいふゝとし。きべてさるものゝてゝいふ抱ハ皆ゝ
傳聞しゝぬゞ了。
さ抱ん上のおゝハある　曰　宮中といふ抱ゝさやうゝ抱らふゝ思ふゝ人ゝ。
思ひきゞ係ゝるゝやうゝゝるもゝゝゝおゝゝゝゝゝ抱らひゞと
ゝゝ。そゝゝ此所の原氏ゝの語ハきべゝ。右近が夕島上ゝゝふゝゝふ
非業抱るゞゝふてゝうゝゝゝゝゝ

きて、そのまゝふてつゝをゝゑ結つるし、きゝもとゝつゝもゝ、そ
ふ著するにもつゝび、おのづゝ死體り体りを結て、結まるや
うふてつるまゝし。但ふとゞれ衣をきせ結ひしゞゞといふハうち
ゝゝといひきゝ結といふふゝ結をゞ、又或ふ衣をゝゞびふゝり
ゝゝて、結ひまゝしといふもゝゞり、ゝゝつをゝ、ゝちゝゝてゝといふ
ゞゞいゝん。

結ゝをゝゝ　同　結きふ、ゝ結ゝ、ゝてゝの結しといふ、ゝ結。
ゝふをぬべきふや　同　結きふいつゝゞゞ。
まゝゝふゝ結ひゝ　四十五のひゝ　但、一説といふ方よゝし。まゝゝふ。
ゝゝゞり結へゝ結るゝし。

まゝゝゝゝ　同　ゝゝてゝ、病のいのゝゝゞふ、祭祓といふゝ、ゝゝてゝ
ゝるハ、陰陽家ゝゝふゝゞし。
京以名いゝ結て　四十二のひゝ　經當し、信ゝゝて、ゝゝゝゝ、ゝゝ結せゝ
ふふといふゝし。花ゝ細流ゞゞふゝゝハ結ゝゝんしといふハふゞり
ゝゝ、おゞゝゝふ、京以名いゝといふゝ倒ゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝふみちゝるよゝゞゞ　同　よハ飛し、間のれゝみぬゞゝゝふ結といい
ふへゝけていゝし。云ゝんゝゝるハ、ゝゞゝし、云ゝハふゞき飛ふゝゞ。
さゞゝゝふをゝゝで　四十三のひゝ　ゝゝでハ、信ゝふゝんぢやゝせゞかま
ゝぬゝいふゝし、ゝゝゝ雅ゝふゝ、ゝゝゝゝといふふ、ゝゝ飛ゝふ
ゝんゝゝおゝゝゝ、つふふゝゝゝゝゝゞのゝふゝゝハゝぬ飛ゝゞし。

はるばるとをこと　曰　注一説よろしく　あがりをつのるとしるる方
の説をかるべし　ゆくゆくはあがりハ夕島のおくえうて　源氏ゑるん
そもゆゑふかゝゑふかゝゑふゑひゑふゑとつゝまゝゝあがりて　名をバ彩し
結をゆふてそつゝゝゑゝ　河ゝハ中ゝ結ひあがりゝゝんの四ゑふきゝゝ
ふあがりゝゝりしゝ　河ゝる心
つゝんゝとあがりゝゝゆひ　曰　ゝをゝみづゝゝゆゝゝ結をバ結ひゝゝいふ
云いがりるゝゝすゆをどゝ結ゝ　をべておがゝゝゝ思つをゝいふこ
ゝゆて　ゝゆ中ふ人ゝ思つゝゝを思る　つゝ　ゝもゝゝゆて　夕島の彩ふ
つゝんれゝ思つをゆひゝんゝいふゝを思る彩ふゆひハ夕島へゝをゝ
結ふゆゝりしゝゝ　曰　ゝゝりゝいふ河上ふゝゝゝゝいふ云結ゝて

いがりかゝをづるべきゝゝゝゝ

抽でゝし　月　孟津ふ[illegible]が男ゆゑ[illegible]ゝ[illegible]び[illegible]上ハ抽でみしゝ[illegible]

しゞつり抽でゝ[illegible]ハ[illegible]べてのやう[illegible]いる[illegible]ハ[illegible]丈ゝ[illegible]

[illegible]ん人の[illegible]ハ[illegible]いる[illegible]ハ[illegible]上の人ゝ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]ゝ人の[illegible]　四十七のウ　二の句[illegible]

[illegible]やう[illegible]ど[illegible]び[illegible]

むつ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]づしきふこゝ[illegible]　四十八のウ　しゞ今ハ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]こゝ[illegible]ふし

[illegible]やゝ[illegible]ん[illegible]　月　新編萩の[illegible]ふ男女の交をなゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ハ男女の交を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ふ[illegible]　月　[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ほの[illegible]ふ[illegible]　月　[illegible]ハ萩又ひ[illegible]ハの[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ふて　月　[illegible]氏[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

中しるをふしてといふをしゃたしるをハ即チ　ますをつひらきふるし。
あふのあをうをう　ねうづとハ、れ〳〵をとりて又ひもをぢ〳〵もちを
ゐをねべし。
うちうけでむひう　四十九の巻　こをハ元堀のすゑ小て、うちうをぞ〳〵
て向ひゐるし。新編萩の露の時の歌をおぢ〳〵出るふつをて向ひゐる
ゐ〳〵元堀のすをゐ畑〳〵ねづ〳〵出て、ひひくべのふし。こをを新編
萩のすゑをハ人をといつ須。ねをぞこていもをゐ新編萩のすを
いつを取うをふゆうりねり〳〵元堀のすゑすぢらひいぢをゐふ人あるべ
ををどしぐちゐをのひ〳〵ゐ中ひんゐうづをゐ中〳〵ふ書文し。
又ひむひゐる人を義人かねといつ説を結ふをぢをし。り〳〵かねの

多ねづハむひゐん人かとをそいふをを。又かねを新編萩をうを
をゐるすをてぞれぢ。うをををつまぢきといつ。をつをふをを〳〵ねし。
ひらぶ結ゆづり　平ねを〳〵　仏出ハをがあひえ〳〵人をゐ仏今を
極楽へやうをて。阿弥陀佛を彩をををいふをを。住ふいつを佛経乃
をぶハ。弓用のすを。
ゐをり〳〵をを〳〵　日　ゐををてをゐるべきハ。うちををてををゐるべきし。住ゐ。
解脱の義をいつをハ。ねをををぞ。
ゆく〳〵ゐ〳〵て　平十一の巻〳〵　ゐうづ〳〵ゐいふねり結へゐをもをゐもぬし。
こまやうねるをぢを　ゐ十三のひ〳〵　原氏ゐのれをふし。住蛾説をぞをし。
ゐせをゐををを〳〵　日　衣をう〳〵をハ。ひうをぢゐ人のゐをぢ。ねをハ。ねをを。

てゝしきまハなし。

畑をたがやすかな　日　百姓一家ふ伊豆下向のましくいつるころし。

あをゝ月日　日　ゆゑ〻ゆゑ八月ハ未ゝ五月の日ゆゑ。

ゆゑふゝをゝ　上ふ月ゝ日ゝいつ八九

和のまねふかくしたがふもとより係氏系の和をもべし。
いとくく　みのひく　くく　ハさくとかるまぢき和の弓ひのかかほど
よわハよきをほめる和し他国にてもるも皆ほどをしうて
弓矯ニあるはかの際ハ銀をてよきよし。但るる弓がこし。
弓がもの　曰　変形る人くいふこしをべく　弓がくいふる皆かるべきるる
ふ遠ひるるこ弓。弓がくくく

なるき好き人は好のゆゑぞ　日　河海細流をゑぶ後くれば西日のるとく
なるぞとも。もしまこと好こゝ者あらば。好きけるき人は好ゆゑ
ひてハ。ゆゑなしし。一本ゆゑ。ちりてゆゝバとてもゑぶ。ふらゝバ。
良暹おゑぐ。なるき好きものあるなりて。好ておゝものぞまづといふこと
うそとおもへぐも。それも。ゆゝバといふ。ゆゑ。又ふふ。ふるりハ。ぐど
ゑを。ゑ。ゑるあて。西日ふまれ。ゝぬ人ゑまれ。ぱ。ゝ。ゝ。ゝる
人。ゝ。ゝ。ゝゑゆゝバ。ゝ。ゝものぞむべきゑぐかといふか
そこゝ。みる。ゑ。ゝ。　日　底の石ゑ。ゝ。ゝ好き。ゑるべきか。何。ゝて海のそ
こまでハ。ひへて。海より。ゑを好ぎよゝハいふんといふこと。引ゑ。用。
ゝ。ゝ。ゝゑゑ。　日　ぐハだの。ゝの。ゑるべし。日も。ゝ。ゝ。ゝ

立てゆく　日　雀を追ふとて立てし。

ちゝひきふわどよ　日　わどハ、人のわども。手ぢかくいふ詞ハ、ぞ了。

かんざし　日　髪ぢかきすぎ毎にいふて。本ぢ枝のさしかざす

を。枝ざしといひ。目の物をさしてゐるちやぢ。ぢ形ぢ

いふるぐひし。さゝばこきハ。額の際より項（えぼし）の方へ。髪の生（はえ）のぞり

させる形のさまをいふ。髪のさんといふも。枝のさんとゆゞて

ろぐへるゆ。ぢ相者くゐ。ゝ。皆ぢ。ぢ人とゐ。ぢ并ゝん

はらをしるかゝ。ゐゐゝぢ女の髪ゝ。并させてハおきゐ考へ

づひゝ。ゝさぐ。ぢ（上）ゝる注あるし。

ぢろふゝ形。　十ぢ了。　さゝ。ぢ。ぢるまぢきるゐ。行ゐと形。おぢえ

ぢかゐしき形ゆ。

ゐ。ぢ名ふゐゐて　日　ゐ。ハ。ゐゝえふをゐて。目つきの志をゝし。俗言ふ

志をゝゝてゝいふ。ぢし。

又ゐしるゐゝ形　日　ゐ。ぢ言ふハ行ゝぢ。上ゝゐと形二人ゝきて。ゐ。ぢ

言ぐゐふハ。ぢゐるゐゝ形。上ゐ見てゝるゐ。又ゐるといてゝ。

いま一人のゐゝゐし。又ゝいふを。言へゝゐて。ゐるゐゝ形の又ゐるゝ

いふゝゝるゐべゝぢ。ゐ。ぢ言ハ。既ゐ言てゆくゝゝ行ゝ。ぢゝゐゐ

ゝるゝいふべきゐ行ゝぢるをや。

ゝゝ色いゝゝゝゝ　十一のひゝ　ゝゝてゐハ。俗言ゐ行きてゐものゝ。雅

俗言ハ。ぢ。ぢいゝ。ぢいゝひぢるし。

よきわかり侍り　十二のひら　をべてよきるといふ言ハよきてゝるゝと
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

まゐりむかふ　日　まゐりいまゐりし。又とるいとがてし。
女房人々よりもてはやされて　十五日の夕　この僧そ。おなじ和の方ゐてし。
てといふへうけしんにべし。まゐりいきはいはゆとゐ。女房ゐ〳〵はやはゆとゐ。
祖母ふう〳〵ひてえ作〳〵んといふまし。但三位のそゐ〳〵ふう〳〵ゐし。
儀のよゐ〳〵もう〳〵　日　ゐ〳〵ちゐ〳〵〳〵いふゐうけ西ふ儀のあけ
まゐむて〳〵いゐうもしゆ西まゐ。儀はゐゐ山川のゐ儀のゐはゆとバ。ゐの細
き流ゐはゐはゐ。ゐ〳〵ゐ西ふゐ〳〵ゐちゐちゐはんてし。
もう〳〵ゐゐきて　十六の夕　源氏ゐし。け但わゐをけ〳〵いふ上へうゐしもん
ひゐ〳〵。もう〳〵退き侍ふゐふ。ゐてゐをぬふゐて。ゐゐみ〳〵ゐゐゐるし。
伝のけゐるべゐう〳〵　日　侍ふ尼ゐへあまの〳〵せ侍ひむゐるべふう〳〵。ゐゐてし。

まゐるべてハ　日　ゐ侍ゐ〳〵ゐてハゐいふてし。
あゐとえう　十七の夕　儀〳〵ゐ〳〵ゐはきんゐゐいふハゐゐてし。侍きふいつり。
おゐとゐ〳〵〳〵〳〵〳〵　日　尼ゐのゐ西はゐ。ゐゐ〳〵ぎはるふてけれて。源氏
ゐの。おゐをゐゐをバ。ゐ〳〵ふもえいひ出ゐえぬし。侍き侍ゐう。
ゐゐひう　日　朔月作説話を引ゐるハゐはゐゐ。
ゐゐはよふゐ〳〵　十八の夕　上旬。せんゐうけ夢を出て。煩悩の業はゐ見ぬ
ゐゐ〳〵ちゐ〳〵いふゐ。ふくゐて。感涙をゐ〳〵ゐゐゐをかゐ〳〵ゐう。
ゐ。ゐ〳〵ゐ〳〵ゐう〳〵　日　侍きふ。後撰集はゐ〳〵ゐむゐゐ演しゐ。
いふゐを引て。ふふ侍ゐ。日記ふう〳〵。ゐゐよりゐちゐけはゐゐき〳〵
ゐべりゐ〳〵ゐむゐりゐ。ゐ月新〳〵いふゐ源氏引ゐう。ゐ侍ゐ日

紀のあふよれど。優〳〵いえでもさ〳〵ぐむ〳〵いへど。後のさ〳〵ぐむも。
紙ばばう〳〵ちあり。紙二白。さ〳〵ぐむ後り紙なしゑ。ゑ氏の
ゑ。ちあの心の白ちてあり。さてしかるハ。花鳥ふ。ふふさ。ゑ男ハ。ゑもさ。ゑ
〳〵いつゑ。〳〵つゑ。ぐ〳〵。後紙の白ちてハ。後ゑ。
さきゑ。ゑ。ゑ。十九の紙。ひゑ。ゑ。ゑハ。よのつゑちとりの人の夢とハ。うゑ。ゑ。ゑ。
ゑ。後。後ゑ。ゑのゑ〳〵ゑ〳〵。ゑ。ゑ。ゑ

くいへまど。さるんをちゝふちなす。
むつゝ。紀日のかの 日 かく皇國をいやしくいひなせハ。あるしんのおゝ
ひらてつゝめちてなげゝいとものかゝこれまがこそし。
うゝめちうゝおるふをへゝ うゝ 古言のひゝ こゝをゝり保氏言妙詞をさて
きをるをのをもゝ。おゝやゝおゝしゝ。思ゝをおゝいるも。云ゝゝゝゝ。
をゝぶきていひのをもも。何ゝをそよ絶かゝてハ。侍ゝのをゝ。されを
をゝハけんのへゝをしもまゝをるをいゝをゝゝゝ。思ゝをおゝてをゝをゝを
むを。をを。をを。お俱ゝ。ををを。為をおるべし。ををゝきゝハをゝふよ
ゝ。保氏。何をゝゝをるハ。をゝゝをゝ。ををハ。上おゝおゝをゝをゝいるかゝを
をゝ。おゝゝをゝてゝ下ゝゝ。何をゝをゝをゝ。

とゝぬをゝをゝき 日 おゝきゝおゝも。百怪の言葉を引也。
ゝゝやゝいのちゝふ 日 こゝハゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
の引言なるべし。
思ひのをゝをゝをゝ。ゝゝ 古言のゝ ほゝゝゝをゝん。ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
のゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものぐるりふうく　同　さえぬ夜とハ、夏ハさめて又初の秋ふる雨なるを夏
ふなりてきゆるなれハ、つくるまきをいつし。
ほたるり　ほどハうく　同　侍従よりの細流るつ。
ちりき　同　注キあがくふ眠るをいふ。へ長えがてし。
侍従のとごとき奔命婦　七九の段　奔と命婦と二人まて命婦ハ主命
婦し。くくをふハ奔と命婦とをいひし。さて侍のごれごとかりるを
いつる命婦一人ゆるし。まる命婦ハ、二ちびをいつり。源氏の乃
春西ゆるハ、奔ハ、ちびし命婦のと、ちるるゆるく、ちていつし。
ぶゝ流ものなく　七の段　ぶとハ、奔ゆ侍ゆるひぐりゆきも、ぶふとし。
ものふりきおゆ　西ゆ　七二の段　こるとハ西ゆきをゆ、ゆ侍るなり。

和ゆ、ゆてハゆしぬくし。注ゆをひぐし。
此ゆ段ゆるゆるく　七三の段　此ゆのとゆるゆるゆ、ゆの段ゆるゆ。
同源ゆくし。　色孤未三段ゆるくふ侍ハ、ふ侍えがてし。
ちゆ、ゆゆりゆゆるゆるゆく　同　危ちゆいくくちゆ侍へるゆゆ
をゆし。何ゆしゆ、いゆゆゆちゆし。
ういゆをゆきく　七四の段　ゆくくゆ侍ゆ、ゆ侍ゆ。
ゆ。えゆくゆゆ。侍ゆ、ゆ。ゆひゆやむゆゆ侍ゆくゆ。えふ
侍をゆゆ。えゆくゆのゆどもみゆりし。
同じ人ゆ　同　河海ふ引ゆる。陸へふゆ方ハ、侍のゆゆしくゆへの侍ゆり。
侍きふゆ人ゆ

山里人あもたくしうそ　四月のひら　そいつ麻をつかりつづけて、保
氏秀も、蒜形どもをひのふりつゝ麻をつくりて、つゝまを洗ふ。
麻をもへつゝり　日　細流ふ、そ、やうやう日ど細をそ、をつくべ、と
行るハいまゞ、たゞもべてうやうやう日の、そ、かゝこゝもつる
そ、ゞおのづゝけてそふてそつれをうてふをつゝび、をを洗ま
て、行そうハを、ををたくべきうハ多るをバおきて、やゝ多るおてふ
をつまひそつゝづゝし。
そひやそゝむとれ島形そうそ　日　どゝ、多やゝ中ゝ、ゝとそ、とゝハ
つふつるも、加ゝいてゝも、つゝまゝ、るまゞ、ゝつふ高ハ、必そゝてハ
れをぬ形し、ゝハ高やそゝん、これ島形ふをそ洗、そゞひふ高を

乱そうやゝん。
高つゝまうけそう　四七月ひら　結白かへ乱べき波ゝハそいふべきをゝる波
ゝそいるハそゝいで。
色ゞまゝかゝん　日　面目ゝとゝとつふ洗ゝるゞ。
そゝ形きそゝ　日　三ゝゞゝそうべきゝゝのそまふハそゝ形きそゝいる
なり。細流ゝゞ。
そゞりつそて　四八のひら　そうゝくゝ歩そりて入ハうゝで、そゞ結ゝゞふ
ゞまよりて、入やうゝけそゝ形るべゝ。俗そふいふそゞるゝ日ゞそゝ、衣をぬ
ぎそゞそゝゝ日ゞそうゝ洗ゝへゝ。
今そうそをれど　四月ひら　新ハまゞふ今そうそゞめそゝをれどゝ。

いと悲しくて無ひ合ふ事ども　日　此時を思ふに八上の事と
いもおなじかりぬべきふるまひ、といひて、第上幼き有ふりつるさま
ざまにおぼしかつ、此女の家にもてづきあふも、但し此時物怪
のなどりにて、夢ぬしの、とのたまふ事ども、
おなじ事ごとにおきて　四十一のひら　しもづかき給ふ事ども、おな
じおもりてきしげ、おきし給ふらんも、花ふさにちるといふもまで
ちるまでおもて、咲てきしげちる事ありけり。
いつくさぐるめへ人よう　日　上のうへづからも八拍きをとつかへ
くつて、そうづからもうとくいひをも、さてうち侍のまへおつ
くさぐるに尼ふるひめ給つるかりてんげ、ふ所にいかに

こへも後つそ、ん形、しめと、年ごろもいひしらせ給ふ事のあ
ふし、細流ふ、うとく後悔しあふもとなるハ、ぐり、後悔のまへ
えうあき拍もきこ、えさぐふつとう　四十二ひら　けうて八、うとく
えの、ぐ形ごのやんが、うとくふいとうのまも、
しあひふまとも　四十三のひら　かりうえあてもいつうもしがぐ、ほう、
ふ人係の者ふ、ふまふ、ふうとも、いつるハ、ぐり、かいつふ相
の物をもこ、ざるほし、しあつふ、うまをかつ、
うとをバ行うも　日　うとをとハ、今えのとがいふ事ふ、ふうとも、
ふくちふえうう　四十四のひら　風俗常陸国、比太知仁波、太乎已曽
川久礼、安太已、呂可奴止也、支見加山乎已衣、乃乎已衣、安

末与支末世留（ヽヨキヽヽセル）こゝハ夢陰なる女の。とがりけるかぎりのようにひゐと
男に。よみうをるゝ。こゝけるこゝハ。男を田をひとりてそこ。他男ハ
かきふ。ゝ。ゝ。ゝ

のるもの、なるべき物なりけり。ふ。近ごろより新しくられぬとていひて、そぢめ
ふ。昨日なれ乘きとよあるはなどふてもあべし。侍従、西ふ〜ふいで。
まろは同じ人ぞ。同 ふと同じこそぞうるもあるべしとし。
おもひやるはきほどのるふ。四十七のひ〜 ひとり儀うて、何の勇士ふ藤も
はきうすはをばといつもし。侍従とぶつ。
よ〜後ふも人きこ〜。同 長津とぶつ。湖月抄流のごと〜。
ふきこげて。同 はきふ。結城日記ふ。ぞぐ引うを、絵えきこうぎはぐ行うと。提
のあ物。ぞぐ。そてはもしといつるぐ〜。細流えがこし。
此本丁はうよ〜。 四十八はう 此本丁おまし〜なぐハこふももとうう
きて。ぞぐかこぐ〜沈引ろをばよ〜。引つ〜ろへぐよきあ本てうし。

ちひさきうぎわふくさ〜ふ。四十九のひ〜 ちとさ〜ふ。侍ふいふ。ふさとあし。
ふぐ〜おき者（まち）ばりといふこし。別てもといつハ〜ぐ。
ぞぐうるの人き。同 ぞぐうのき。上りいつるがぐ〜。
女きんやちうはるうんよき。同 あ〜ぐ〜ぐ〜がぐ〜ぶこを引べきうふもわ〜ぐ。
はぐ〜ちきこ〜。同 こ是八上下はちきのつぎぐ義。保氏ふのはぐ〜ちはいつるや
うふと笑し〜。
足絵ふび者はち。同 ふ。ふぐを上へつをてうる絵き。むぐとし。さてハふとふ
ふ。ぞぐのそぐ。
こきよぜふ。五十はう 点例乃むぐこし。
ふ〜よふ。四十一のひ〜 ふ〜ふふ。ぞぐをき者人のきるうるし。ほふ。

大やう好るまゝいつたゝらろし。まゝはなし。あひまたてゝいふハ。
ふゝようへう。紀ることふハうゝび。
いよ〳〵きまゝ。今ハ風雲。今ハ風雲ハうゝざ
永ぶ公より後。いち名うゝきまゝ。ををうゝびのゝとゝているし。
ぢんゝ　日　侍臣ゝ。ゝ。ゝ。

ちくぶまごえ田〜きへざるうへおいやらきやとむつうしくまぐこと
ろぐもちくぶと多くてなんぢひのかおうきぐ〜おぐ〜多やうも
まて、ムりほまぢいろ多もうりばゑくもおもひおろてとぐ〜
ちる〜と先きてんこの〜。